

保険相互会社をめぐるエピソード(5) 国光生命 業績伸長と情報公開

国光生命保険相互会社（以下、国光生命とする。「国光」の読みは「こっこう」）は、第一生命、千代田生命に続いて、わが国で第三番目の生命保険相互会社であるということから、第三生命保険相互会社という名称で設立計画がなされた。最初は、経営権等めぐり混乱が生じたが、島津忠亮伯爵が社長に座り、岩間六郎が「支配人」の役割を果たすようになると、比較的順調に業績を伸ばした。

戦前において、第一、千代田を除く生命保険相互会社は、これまで取り上げた、東海生命、蓬萊生命、中央生命三社とこれから取り上げる日本医師共済生命を含め全部で 5 社存在した。これら 5 社は、昭和恐慌を経て、合併を行い、昭和生命保険相互会社となった。国光生命は、これら 5 社中で営業成績が良かった会社である。新契約の推移は、グラフのとおり変動があるが、契約額では他の中小相互会社と比べて大きかった。

第一生命と千代田生命を除く、中小相互会社 5 社は、もっとも新興の日本医師共済をのぞいて、それぞれにガバナンス問題や業績不振問題等を抱えていた。しかしその中でも、国光生命は、比較的良い業績を示していた会社である。生命保険相互会社の全保有契約に占める中小 5 社のシェアの推移を示したのが次に示したグラフである。これを見ると、東海生命が一時的に急激に保有契約シェアを大きくしたが、その後急激な落ち込みとなったのに対して、国光生命は安定的に推移し、大正時代末期までは、10%程度のシェアを維持していた。この時期に第一生命と千代田生命が五大生命の一角に食い込むほどの成長をしていたことを考えると、10%以上のシェアを確保していたのは中小としては立派な業績であるといえよう（同社の「営業案内」の画像を参照）。

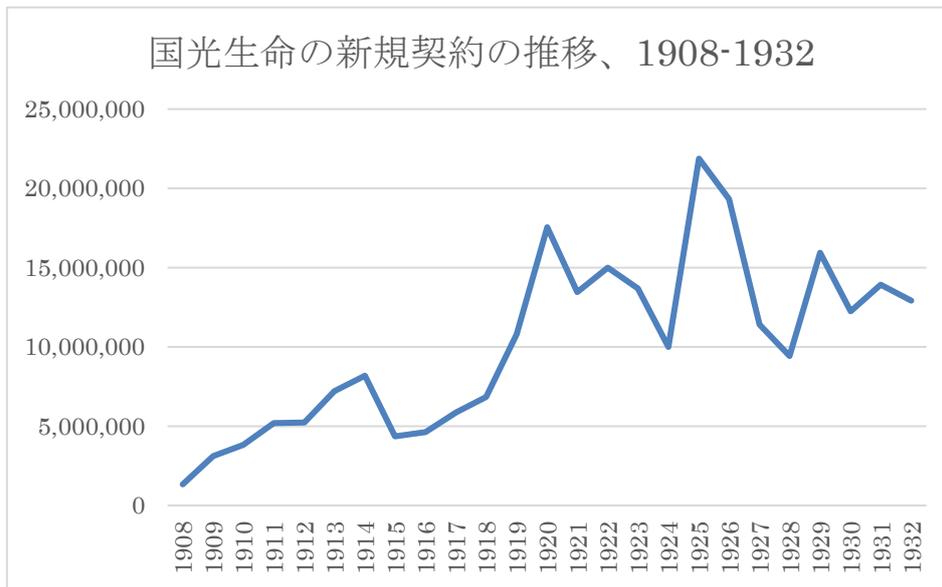
昭和恐慌に突入すると各社とも 5%を切るほどのシェアに落ち込む傾向にあった。国光も他社よりは頑張ったが、この傾向にあらがうことができなかった。その結果、中小生命保険相互会社 5 社が合併して、昭和生命の設立となるが、この話は、日本医師共済生命について語った後に触れることにしたい。

国光生命の創業は、創業事務所や初期の本社事務所にみる限り、大変つましいものであった。その後、京橋尾張町に移転し、そこを改築して本社とした。同社が他の中小相互会社と比べて比較的堅実に業績を伸ばした理由はなんだったのだろうか。

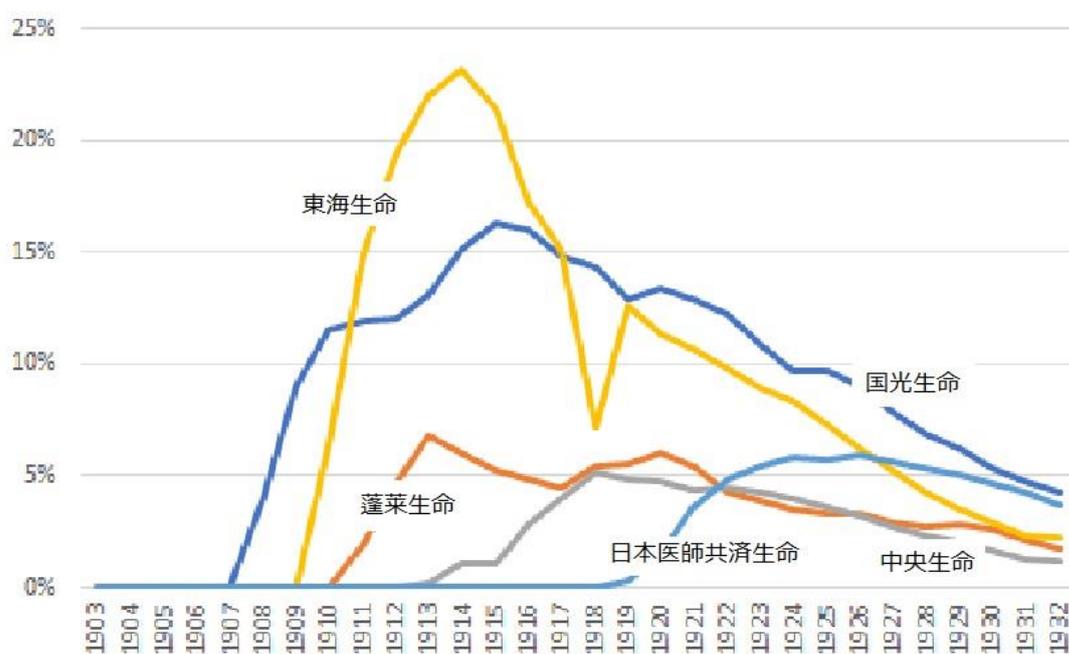
私見ではあるが、その秘密は、次に示した二つの史料に現れているように思われる。ひとつは、画像を掲載した『成績要覧』（明治 43 年度業績）である。表紙に「我社の全会員に配布す」とある。また同社の社報である『国光日報』を見ると、自社の地域別業績をはじめ詳細にディスクローズされている（第一面の画像を掲載）。これらから、同社が初期から、情報公開において熱心であったことが推測できる。他の中小の生保相互会社では、情報公開がなされていないことが経営的な混乱を強めた事例がみられる。このことを考えると、国光生命が、（完璧なものであったとは思わないが）情報公開に熱心であったことは、業績の伸長と経営の安定と関係があるものと思われる。

保険毎日新聞「みちくさ保険物語」109

では、このような経営風土を形成されたのはどうしたなのか？この問いに答えるためには、個性的な支配人である岩間六郎の名前を上げざるをえない。紙面が少なくなったため、「国光生命の巻」は次回に語り継ぐことにしたい。



中小相互生保の保有契約高シェア（対全相互）



組織互相



保 險 案 內

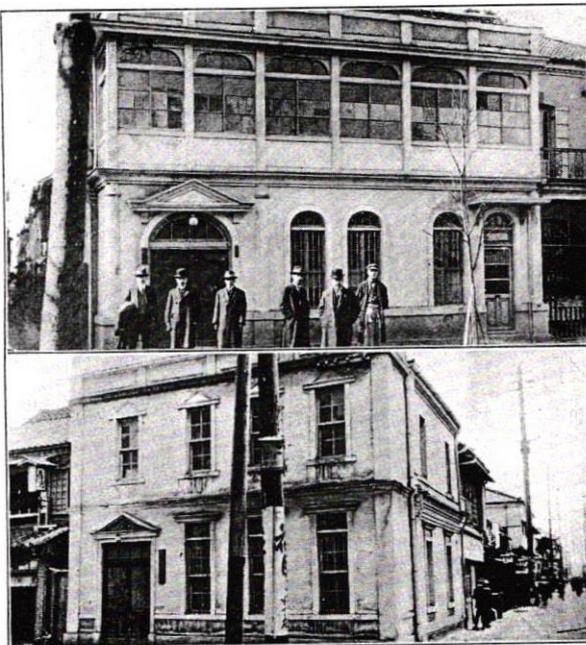
座銀京東 社本

社會互相險保命生光國

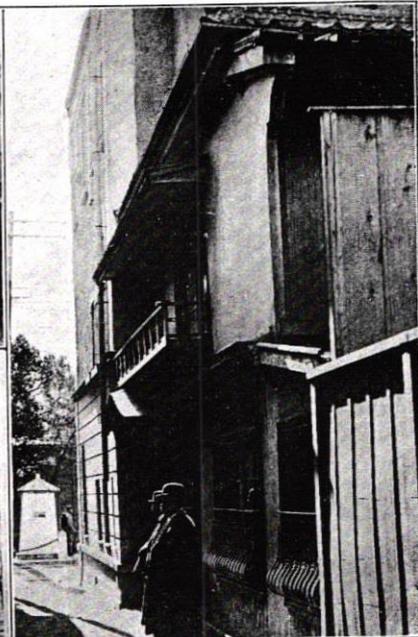
山形支店	長野支店	鹿島支店	仙臺支店	北見支店	福海支店	福岡支店	金澤支店	廣島支店	名古屋支店	京都支店	大阪支店	東京支店	本社
山形市七日町四五番地	長野市大字鶴賀間御所町一二三六番地	鹿島市六日町一〇番地	仙臺市大町三丁目	札幌市南一条西六丁目	福岡市天神町四二番地	金澤市下堤町七番地	廣島市細工町二〇番地	名古屋市中區新榮町三丁目二九陸田ビル内	京都市下京區東洞院松原北入五八番地	京都市東區京橋三丁目七八番地	大阪市東區東洞院松原北入五八番地	東京市京橋區西六丁目瀧山ビル内	東京市京橋區銀座六丁目
電替	電替	電替	電替	電替	電替	電替	電替	電替	電替	電替	電替	電替	電替
仙臺	長野	鹿島	仙臺	小樽	福岡	金澤	廣島	名古屋	京都	大阪	東京	東京	東京
野田	野田	野田	野田	野田	野田	野田	野田	野田	野田	野田	野田	野田	野田
八	一	三	二	九	三	七	三	五	二	二	六	三	六
八	一	三	二	九	三	七	三	五	二	二	六	三	六
七	〇	六	五	四	一	〇	九	九	六	一	三	二	九
八	五	〇	二	一	七	五	八	四	一	四	〇	三	六
四	〇	〇	一	七	三	九	七	九	二	四	一	七	四
番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番

国光生命「保険案内」大正14年から昭和初期。

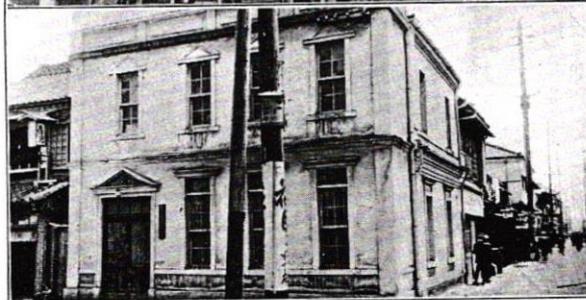
(一) 京橋鎗屋町の本社事務所 (左上)



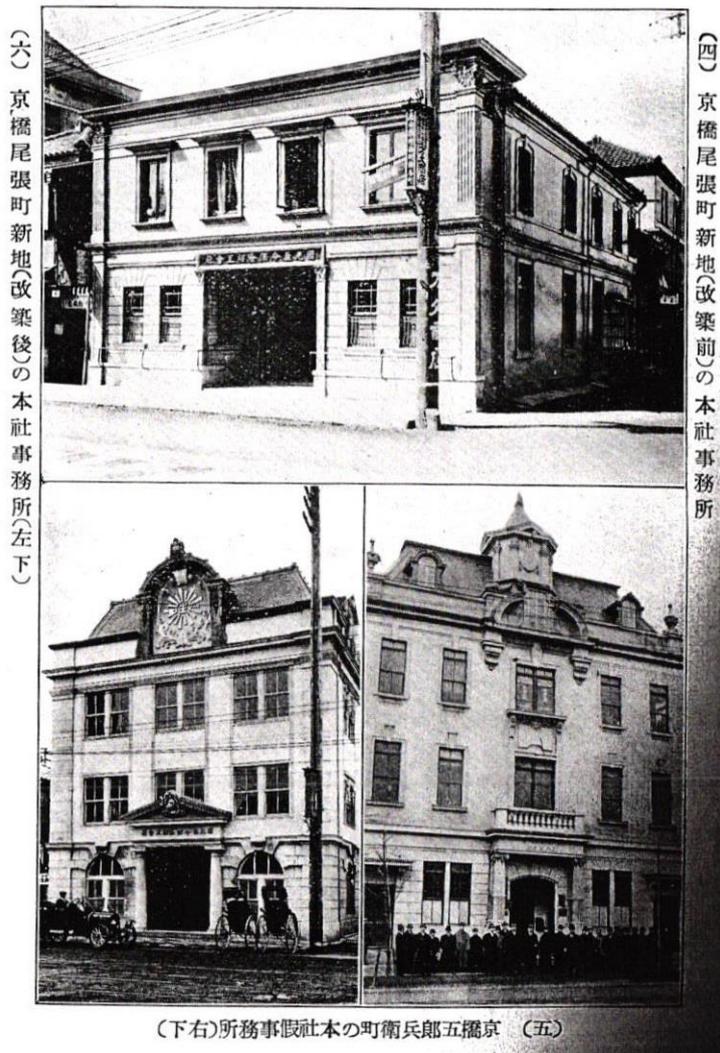
(二) 日本橋本町の我社創立事務所



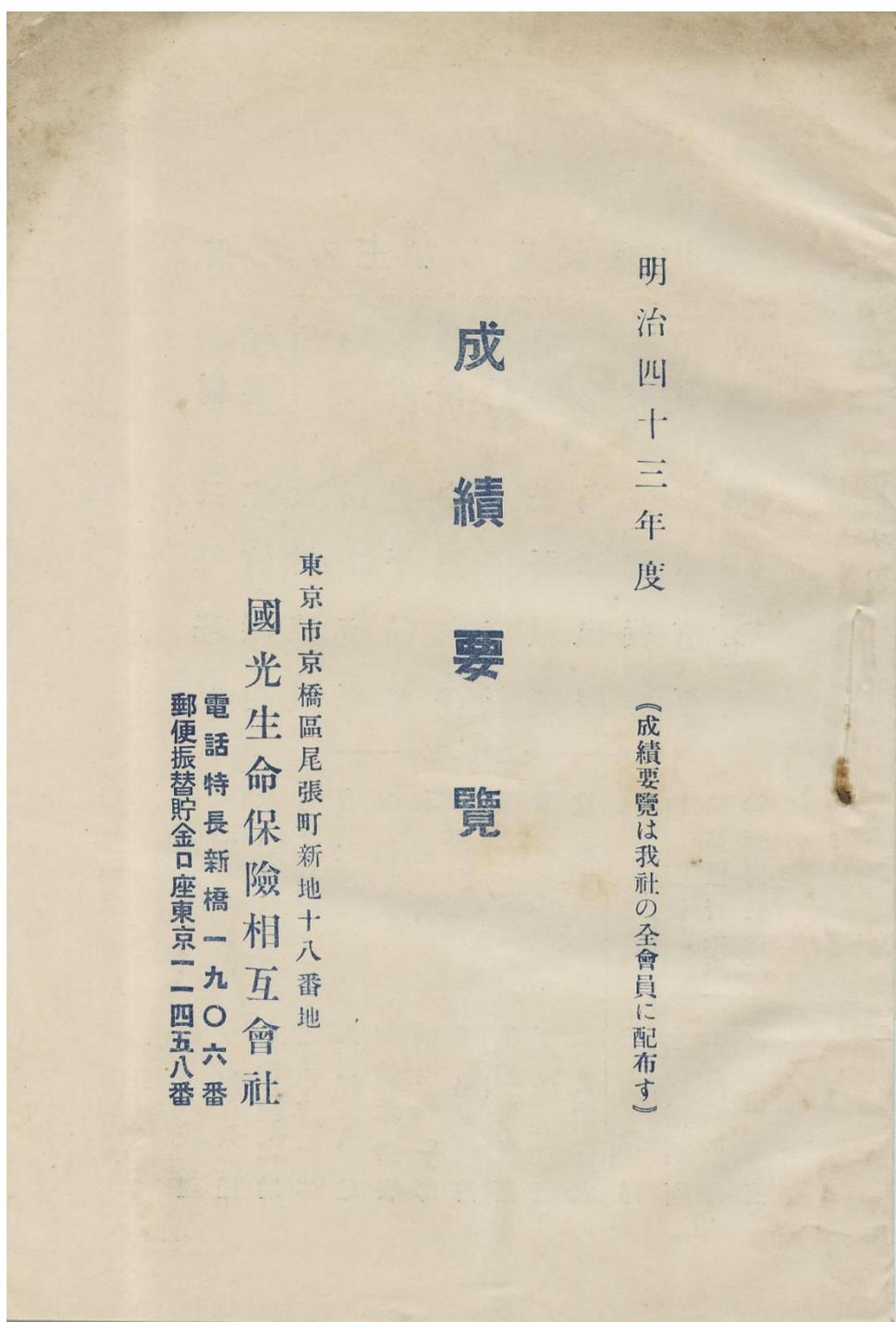
(三) 京橋南南部町の本社事務所 (下左)



右：日本橋本町の創立事務所。左上：京橋鎗屋町の本社事務所。左下：京橋南南部町の本社事務所。(出典：岩間六郎『国光生命昔ものがたり』大正15年)



上：京橋尾張町の改築前の本社事務所。右下：京橋五郎兵衛町の本社仮事務所。左下：京橋尾張町改築後の本社事務所。(出典：岩間六郎『国光生命昔ものがたり』大正15年)



国光生命『成績要覧』明治43年度。

(一) 號七〇一第

報月光國

月八年七正大

國光月報

(每月一回發行) ●明治四十年十月開業 ●明治四十二年十月創刊 ○...月報の番號順に綴込の上御保存相成度候... (非賣品)

社業の梗概

●大正七年七月末日現在

加入被保險者 五萬八千五百〇二件

總保險契約高 三千四百四十萬三千二百四十八圓

●總保險契約高より向ふ一ヶ年間に收入すべき保險料の總額

△大正七年七月末日現在 一百七十五萬二千五百餘圓

●開業以來加入者に支拂ひたる保險金

△大正七年七月末日迄 一百四十四萬六千九百九十三圓(此の人員二千)

●開業以來毎期の決算より生じたる我社の總剩餘金(即ち利益金)

▲第十一年度決算時迄 五十九萬一千四百四十四圓七十四錢二厘

●開業以來毎期の剩餘金より生じたる加入者に對する利益配當金

▲第十一年度決算時迄 三十七萬三千六百三十圓五十一錢

(外に滿期配當金の配當利子三千〇八十四圓七十一錢有り)

●開業以來加入者に實際支拂を了へたる毎年配當の利益配當金

▲大正七年七月末日迄 二十萬一千八百五十八圓五十六錢

□加入者の爲めに積立て在る社員配當準備金

▲大正七年七月末日現在 十七萬四千八百五十六圓六十六錢

●被保險者の爲めに積立たる責任準備金の總額

△第十一年度末(大正七年七月末日) 三百六十二萬五千五百八十九圓二十三錢

●我社の有する資産の總額

△大正七年七月末日現在 四百十五萬一千二百七十七圓七十三錢二厘

●最近第十一年度の剩餘金(即ち利益金)

△大正七年六月末日の決算期 十五萬一千八百三十一圓三十五錢

大正七年 第一〇七號

頁六十紙本 (957-972)

東京市京橋區尾張町新地十八番地 國光生命保險相互會社 電話新橋(特選)一三〇九六番 振替貯金口座東京一四四八番

各社開業十年十ヶ月目の保險契約高

我社は明治四十年十月二十五日の開業にて大正七年七月末を以て正に十年十ヶ月を経過せり茲に社業進歩の状況を知らむが爲め先進同業二十一會社と同じく十年十ヶ月目に於ける保險契約高を調査するに實に左の如き成績なり此間著しき時勢の變遷ありしとは云へ如何に我社が多數の會社中比較的劣く順調に且つ内容充實せる契約を以て良好なる發達を遂げつゝあるかを知るに足るべし

Table with columns for company names, opening dates, and insurance contract amounts. Includes entries for 國光、日清、日華、日東、日南、日北、日西、日東、日南、日北、日西、日東、日南、日北、日西.

東京支部(所管區域) 東京、神奈川、新潟、埼玉、群馬、千葉、茨城、栃木、山梨、長野、(管外) 臺灣、朝鮮、(事務所) 東京市京橋區南鶴町二丁目一番地(電話) 新橋三六八七番(振替貯金口座) 東京三二二〇番